



双塔

カトリック新潟教会

2019年6月
No. 373

思いわずらわぬ心

協力司祭 鎌田 耕一郎

(イエスと運命) もし私たちが、イエスと同じような運命のもとにおかれたとしたら、おそらくその運命を嘆いたに違いない。貧しい家庭に生まれ、文化的におくれた地方で、三十年の間、人に知られずに生活を送った。語り合う相手もなく、最も親しい人びとからも理解されず孤独であった。時の権力に排斥され、大衆の憎しみを受け、その惜しみなき愛の教えと活動も、屈辱的な死によって切断されたのである。

しかし、殆ど耐え難いほどの事実の中で、イエスには緊張や不安のかげは見られない。事のなりゆきに任せていたのでもなく、恐るべき現実をありのまま肯定する決意をしていたのでもない。イエスのまわりには悲劇の影はなく、愛と平和の静けさと人を慰め力づける光が漂っているのである。

イエスにとって、運命とは御父が望むところのものであり、御父への柔順のために自ら欲するところのものだったのである。イエスは御父との間に愛の一致があり、その意志は御父の意志と同じものであることを常に述べておられる。このような関係において、運命はその暗い冷たさと捉え難い不可解さを失い、愛の親密における父と子の一致として、あらわれるのである。

あの絶望的に響く十字架上の「私の神よ、なぜ私をお見捨てになったのですか (マタイ 27・46) という叫びにおいてさえ、愛における父と子の関係は疑われていないのである (グアルディニ “運命と啓示”参照)。

(花と鳥) 「空の鳥をよく見なさい。野の花がどのように育つのか注意して見なさい」 (マタイ 6・26-30)。パレスチナは野生の草花の豊富なところで、“野の花”は、赤あるいは紅紫色のアネモネだったと考えられている。また空の鳥は、その地理的位置により渡り鳥の数が多いう。イエスは鳥の巣 (マタイ 8・12) や、その習性 (マタイ 23・37) について語っている。空の鳥はカラスとルカ (12・24) は記している。

イエスは花と鳥の美しい描写を通じて、明日を思いわずらわぬ心を教えられる。それは神の摂理に対する信仰であり、イエスと同様に父なる神の愛の秩序——摂理の関係の中に生きることを教えられたのである。

思い煩わぬことへのすすめは、優しい神さまに厄介なことのすべてをお任せし、甘えて怠けることでもなく、「愚者が失敗をしでかした時に持ち出す口実」(ピアス“悪魔の辞典”)と皮肉られるような、主体性を失った虚弱な態度を意味するものではない。

それは「神を愛する人びとには、神がすべてをその善に役立たせてくださる」(ロマ 8・28) という神の保証に対する、揺るがぬ確信と、神の呼びかけに応える英雄的勇気を意味するのである。その時から私たちは、初めはおぼろげに、そして徐々に明らかに、善のみでなく悪の存在も許されているこの世界に、神の愛の支配が貫き通っていることを理解し始めるだろう。

イエスは「蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい」(マタイ 10・16) と教えられた。しかし私たちは何よりも、恩寵の空を朗らかにさえずりながら、はばたく空の鳥と、超自然の美しい花びらを開く、野の花になりたいものである。